

分布：全国

## ヒガンバナ（ヒガンバナ科）

学名：*Lycoris radiata*

### 彼岸花

別名：曼珠沙華(マンジュシャゲ)、狐花、はみずはなみず(葉不見花不見)など

#### 主な生育場所

田畑の畦や路傍、土手、墓地など。稲作とともに有用植物として中国大陸から渡来した植物とされ、人里やその付近でしか見られない。あまり日がささない被陰環境にも強く、湿った場所を好む。

#### 特徴

鱗茎で増える多年生。9月中旬に高さ30～50cmほどに花茎を伸ばし、鮮紅色の花を5～7個輪生させる。6枚の鮮紅色の花弁は長さ約4cm幅5mmで、強くそり返り、雄しべと雌しべは長く突き出る。晩秋に幅6～8mm長さ30～50cmでツヤのある線形葉を地面から放射状に伸ばすが、翌春には枯れる。夏は地中の鱗茎のみで過ごす。



名前の由来：秋の彼岸前後に開花することから彼岸花。また梵語で“赤い花”をmanjyusakaと呼び、「曼珠沙華」とあてた。「はみずはなみず」とは花と葉が同時に存在することがないことから。

#### <農業との関係>

鱗茎には強い毒性もあるが大量のデンプンも含み、水に晒せば毒性分であるアルカロイドが除去されるため、古来から飢饉時の救荒作物として里地やアゼに植えられてきた。また、毒成分のため、ネズミやモグラなどが寄りつかないとされたことも、積極的に田畑のアゼなどに植え付けられてきた理由とされている。他の植物の発芽や成長を抑えることも知られ、アゼの雑草抑制にも使われる。



棚田のアゼに植えられたヒガンバナ

#### <生活史>

関東地方の例(目安)



#### <類似種>

キツネノカミソリは8月のお盆頃に花茎を伸ばし、黄赤色の花をつけ、花弁は反り返らず雄しべと雌しべは外に突き出ない。ショウキズイセンはヒガンバナと同時期に咲くが、花は一回り大きく色は黄色で花弁の縁は波打つ。

#### <一言うんちく>

毎年、秋のお彼岸頃に花茎を伸ばすヒガンバナ。その秘密は冬の寒さと夏の暑さにあります。ヒガンバナは冬季の低温に会わないと花芽分化せず、また25～30℃の高温によって花芽が成長します。花芽が充分成熟し、地温も下がる彼岸頃がちょうど花茎を伸ばすタイミングとなるのです。



アゼのヒガンバナ群落(葉期)

#### <人との関わり合い>

ヒガンバナは3倍体のため結実しにくく、全国に見られるヒガンバナはほとんど人の手を介して植え付けられたと考えられている。現在でも観賞用に植えられることが多い。有毒植物だが救荒作物や獣害よけなどに利用されるなど、古来から人間生活と関わりが深く、ヒガンバナの呼び名は全国に数百以上あるとされる。鱗茎は水に晒して毒成分のリコリンを除去しないと食用のデンプンをとることができないが、生の鱗茎はすり下ろして塗布すると、肩こりや乳腺炎、いんきん、打ち身などに効くとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 路の辺の寺師の花のいちしろく人皆知りぬわが恋妻を（柿本人麿歌集）

曼珠沙華の花あかあかと咲くところ牛と人との影通りを（北原白秋）

曼珠沙華あつけらかんと道の端（夏目漱石） 曼珠沙華落暉(らくき)も薬(しべ)をひろげけり（中村 草田男）

歩きつづける 彼岸花咲きつづける（種田山頭火） 父若く我いとけなく曼珠沙華（中村 汀女）